

ALUMNI AND ALUMNAE NEWS NO. 5

令和6年3月に、第V期 教職実践高度化専攻（教職大学院）院生が2年間の学びを終え、教職修士（専門職）の学位記を手し、それぞれの道に巣立っていきました。教職大学院では、学校教育に関わる専門性と実践力を持ち、学校教育における組織的取組や授業力向上、特別支援教育の取組をリードし、多様な教育課題に応えていくことのできる資質・能力を備えた人材を育成しています。第V期修了院生も、高知県の課題解決に向け、それぞれの院生が自ら設定した研究課題に沿った研究活動に邁進し、大きな成果を残すことができました。

学校マネジメントコースの近藤史恵さんは「地域連携を活かした学校運営—地域に開かれた信頼される学校づくりの実現（学校運営協議会）—」、濱田幸伸さんは『令和の日本型学校教育』を実現するための『チームとしての学校』の在り方について—働き方改革を視野に入れた業務改善とミドル・リーダーの役割—、松木 啓さんは「自己指導能力を育むための校内支援体制の構築—セルフ・コンパッションに着目して—」、山崎一平さんは「組織的な学校運営の形成に関する研究—全教職員が参加するシステムの構築を通して—」について研究し、学校の教育活動を効果的にマネジメントして、生徒指導上の課題解決はもとより、子どもを取り巻く校内の組織改革や活性化、及び地域連携についての学びを深めました。

授業実践コースの池川潤也さんは「高校理科における主体的・対話的で深い学びを実現する授業モデルの開発—生徒の学びの深まりを見取る形式的評価に着目して—」、佐藤 晃さんは「メタ認知能力を育てる理科学習指導法の研究」、杉本 瞳さんは「国語科における学びの自覚を促す『対話』的活動の研究」、中谷憲二さんは「向社会的行動につながる道徳性を育む道徳授業の在り方の研究—『共感力』と『道徳推論の力』の育成に焦点を当てて—」、柳花一輝さんは「生徒のエンゲージメントを高める国語科授業の在り方について」、吉本果矢さんは「思考ツールとしてICTを活用した算数科授業の研究」について研鑽を深め、授業実践の高度化を図り、それぞれの授業力を高めることで質の高い学びを獲得しました。

そして特別支援教育コースの柏木 妙さんは「社会参加を見据えた自己理解と進路指導」、高野 彩さんは「困り感のある児童の支援体制づくり」、西脇高峰さんは「日本語教育の指導方法の検討」、渡邊莉都さんは「生きる力につながる知的障害教育における教科指導の在り方について」、特別支援教育において、個別支援だけでなく組織的な推進体制を構築する効果的な方法を探り続けてきました。

それぞれの院生の成果は、各学会発表や学術論文として公表されています。4月から、現職派遣修了院生10名及び附属学校所属修了院生1名は、学校や教育委員会等で勤務し、ストレートマスター修了生3名も、教員として活躍したり、国外で更なる飛躍を遂げようと高い志を持ち活躍しています。ここでは、本教職大学院で学んだ「理論と実践の融合」から自己成長を遂げ、高知県の教育現場の中核的存在になり、即戦力として教育現場で努力を重ねながら、多くの教員への波及効果を目指して日々実践している様子と、日々奮闘している様子を語ってもらいました。

【学校マネジメントコース】

近藤史恵さん 「町全体で子どもを育てる『学校運営協議会』を目指して。土佐町立土佐町中学校」



4月から在籍校に戻り、コミュニティ・スクールの運営に関わりながら、これまでの研究を継続しています。本年度は学校運営協議会の委員に任命されたことで、担当である総合的な学習の時間を中心とした地域と学校の効果的な教育活動について協議会で提案するなど、社会に開かれた教育課程の実現に向けて模索しているところです。昨年度協議会で検討した「目指す子ども像」の実現に向けて、学校・家庭・地域・地教委の4者の役割に基づく実行性の高い協議会となるよう、これからも引き続き研究を進めていきます。

濱田幸伸さん 「事前協議の円滑化やシステム化等を通じた会議の改善の継続。高知大学教育学部附属中学校」



4月から在籍校に戻り、学年主任をしています。在学中は、チームの協働性を高めるためには「時間資源の創出が必要になること」に焦点を当て、校内会議に着目しました。事前協議の円滑化や活性化のためのシートの開発や、事前協議のための枠組みの整備について研究しました。その結果、「会議の時間短縮」は実感されました。今年度も引き続き、会議の効率的な実施のために、情報の事前共有の方策の改善実施を継続しています。学年団では「事前協議の活性化」も進みました。全体に展開し、浸透させる方策について検討、検証して行きたいと考えています。

松木 啓さん 「子どもたちの声に耳を傾けて. 土佐市立高岡第二小学校」



4月より在籍校にもどり、5年生の学級担任をしています。学校では、昨年度に引き続き、毎朝全校一斉のマインドフルネス瞑想を実施しています。また、身体と心の主観的健康感アンケートと合わせ、子どもの様子と気持ちの状態を見取ることを続けていますが、落ち着いて過ごすことのできる環境づくりの重要性を体感する毎日です。全教職員の協力、同僚性の有り難さを感じながら、子どもの実態に合わせた支援の在り方を検討しています。これからも子どもたちの声に耳を傾けて、現場でできることを続けていきたいと思っています。

山崎一平さん 「大規模校における学校経営計画を核にした組織的な学校運営の実現に向けて奮闘中！ 香南市立野市小学校」



昨年まで、教職員が14名の現場で、学校経営計画を核にした、主体的で組織的な学校運営への参画を促すためのシステムの構築を実践し、一定の成果を上げることができました。今年度は、全教職員58名の大規模校に教頭として勤務することとなり、改めて組織的な学校運営のための意識付けや、全体を動かすためのシステムの構築は未だできていません。初めての行事や、外部との連携など後手になることが多いですが、担当している部会をマネジメントカレンダーで進捗管理し、各分掌（担当）が見通しをもって、主体的に動けるための下地を作っています。この一年の活動をルーティーン化し、可視化することで、主体性を引き出していきたいと思っています。

【授業実践コース】

池川潤也さん 「学びを深め、クリティカルシンキングスキルを伸ばしたい！ 高知県立高知国際高等学校」



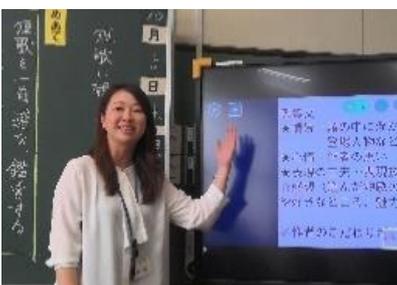
ポールタフは「成功する子 失敗する子(2013)」において、クリティカルシンキングスキルをはじめとした非認知能力はIQに関係なくすべての子どもが等しく伸ばすことができる、と述べています。国際バカロレア(以下IB)は、学び方を学ぶスキルとしてATL(Approaches to learning)という汎用的なスキルを、すべての授業で発揮することで、心身ともに生徒の成長につながるとしています。これらのことから、ATLを発揮して課題を解決するよう授業をデザインし、前期が終わろうとしています。クリティカルシンキングスキルに有意な伸びが見られることを期待しています。

佐藤 晃さん 「大学院の研究成果を活かし、生徒の変化を見取れる授業を心掛けています！ 神奈川県立小田原高等学校」



大学院では、生徒のメタ認知を向上させるため、「見通し」と「振り返り」を取り入れた授業案を開発し、教員として良いスタートができるように研究に取り組みました。分掌や部活動の業務に慣れるのは大変でしたが、授業プリントのフォーマットを大学院で作成していたので、授業作りの負担を軽減することができました。最近、課題の提出や取組の記録などをICTを用いて行い、成果物の回収、返却を簡易化し、生徒も自分も楽になるように試行錯誤しています。

杉元 瞳さん 「対話を通して、生徒自身が読みの深まりを自覚できる授業を目指して 南国市立北陵中学校」



4月から在籍校に戻り、3年の学年担任、進路指導主事をしています。進路指導をする中で改めて基礎基本を定着させることの大切さや自分の思いや考えを正確に相手に伝える力を育成することの重要性を感じ、日々教材研究に励んでいます。上手いかないこともたくさんありますが、授業中、生徒とのやりとりから気づかされることは多く、授業を生徒と一緒に創っていくことの楽しさややりがいを感じています。また、教職大学院での学びや出会いは卒業後も大きな私の支えとなっています。この経験を生かして、今後も対話あふれる授業を目指し、生徒と一緒に日々成長していきたいと思っています。

中谷憲二さん 「教職大学院での学びと同様に、高知県教育委員会事務局小中学校課」



在学中は授業実践コースで勉強させていただきました。今年度4月からは、高知県教育委員会事務局小中学校課で勤務をしております。担当業務は「教育DX推進」や生活科・総合的な学習の時間に係る「探究的な学び推進事業」等です。各事業を通して、効果のある取組を見出したり、検証したりして、その取組を県内に広めることを主な業務としています。教職大学院に通っていたときと同様に、日々学び、知識を更新していく姿勢で毎日の業務に臨んでいます。教職大学院での出会いと学びに感謝しています。

柳花一輝さん 「教職大学院での学びを土台として、生徒の力を育成できる授業づくりを目指す 仁淀川町立仁淀中学校」



本年度より仁淀川町立仁淀中学校で勤務し、2年生の学級担任をさせていただいております。現場1年目ということもあり、慣れないことばかりですが、同僚の先生方や教職大学院での学びと経験に助けられながら、充実した教員生活をスタートすることができています。在学中、国語科における「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた研究を進める中で得られた学びは、日々の授業づくりの土台となっています。今後も教職大学院での学びを土台とし、理論と実践を往還、融合させていくことで、生徒の力を育成できる授業づくりを目指していきたいと思っております。

吉本果矢さん 「教科の本質に迫る ICT 活用を目指して、いの町立伊野小学校」



私は新任校で4年生の学級担任をしております。久しぶりの現場は忙しいですが、子ども達と過ごす毎日はとても楽しいです。今年度は7年次研修を受講し、教科の本質に迫るためのICT活用について、これまでの研究を活かしながら、自己研鑽に努めています。10月に、「仮想空間」を活用した社会科の授業実践を行います。「よさこい踊りはなぜ70年続いているのだろう」という課題に、歴史的背景から考えを深めることができる授業をデザインし実践を行ってまいります。小学校籍なので、あらゆる教科でのICT活用をこれからも考えていきたいです。

【特別支援教育コース】

柏木 妙さん 「生徒が社会参加する際に、自分の強みを理解して活用できる支援を目指して 高知県立城山高等学校」



4月から在籍校に戻り、教務部長、1年学年主任、通級指導教室担当として特別支援教育に携わっています。本年度も昨年度に引き続き新1年生を対象にインターンシップに向けたSST（Social Skills Training）を行い、社会参加に向けた自己理解を促す指導を行っています。また、大学院で学んだことを1年学年団や通級担当の先生方と相談しながら一緒に試行錯誤する毎日です。目まぐるしく過ぎていく毎日ですが、今後も、理論と実践の往還を続け、生徒が社会参加する際に、自分の強みを活用できるよう個々に応じた支援を行っていききたいと思います。

高野 彩さん 「通級指導教室での学びを通常の学級に活かすために、高知市立初月小学校」



今年度、勤務校の初月小学校では念願だった通級指導教室（自校通級）が新設されました。4月から現場に復帰し、通級指導教室の担当として、通常の学級での困り感のある児童を対象に指導を行っています。昨年度研究してきた、児童のニーズに合った学びの場において、課題に合った指導を個別や小集団で行い、通常の学級で学びを活かすことができるように、通常の学級担任との連携を日々行っています。その際には、児童の実態の共有はもちろんですが、どのような支援を行っているのかの共有を大切にしています。今後も、それぞれの児童が自立していくための指導を行っていききたいと思います。

西脇高峰さん 「更なる飛躍を目指し、頑張っています。スペインより」



私は、現在スペインのバルセロナに在住しており、大学院で研究していた日本語教育の方法の知識、経験を活かして日本語の家庭教師等しながら、また、日々スペイン語の勉強をしつつ生活しております。来年以降はメキシコのインターンシップに参加したり、博士号取得に向けて勉強したりしていく予定です。現在、多くの外国人が日本の文化、言語に興味を持ち、日本語の学習者は年々増加しております。今後も大学院で研究してきた「日本語教育の指導方法の検討」の内容を深めていけるよう精力的に様々な活動に参加していきたいと考えています。

渡邊莉都さん 「教員間での共有を大事にした教科指導の実践を目指して。高知県立山田特別支援学校」



4月から在籍校に戻り、小学部1年生の担任をしています。初任者を含む3人の担任と一緒に、研究で提案したツールを実際に活用して、知的障害のある子どもたちへの教科の指導を行っています。付けたい力は何か、そのためにどんな指導が必要であるのかを日々話し合い実践することで、習得状況の把握、教員間での共有、共通認識の大切さを実感しています。研究で提案した単元計画シートは、校内研究の中でも活用し、全校で教科指導の充実に取り組んでいます。取組を通して、知的障害教育における教科指導の意義が周知のものとなるようにこれからも研究を続けていきます。

【在院生へのメッセージ】

学校マネジメントコースより・・・現場を離れ教職大学院で学んだ2年間は、教職大学院の先生方や異年齢、異校種の仲間との交流を通して、新しい視点を学ぶことができた貴重なものでした。皿鉢ゼミの発表前には、コースの壁を越えて院生同士で発表し合い、それぞれのコースの視点や互いの知識や経験をもとにアドバイスをし合ったことが、ついこの前のように思い出されます。

在院生のみなさん、教職大学院での先生方や院生の仲間とのつながりを大切に、自身を高めながら研究を深めてください。有意義な大学院生活を送れますように願っています。

授業実践コースより・・・現場では常に教員は忙しく、生徒たちも多くの宿題・学力検査に追われ、我々が子どもだったころとは全く様子が違います。かの教育革命実践家の藤原和博氏は、著書や講演で「頭の良さは情報処理力と情報編集力で決まる。しかし教育現場は情報処理力ばかり鍛えている。」と言っております。情報編集力は、答えのない問に対して粘り強く取り組むことで身に付くことは容易に想像できます。私達は大学院で答えのない問に対して学びを深めることを2年間も経験できました。この経験が土台となって、日々授業をデザインしています。国際バカロレアのカリキュラムはウィギンズ (G. Wiggins) とマクタイ (J. McTighe) の逆向き設計論をベースに設計されており、授業者が答えを知らない問を提示して生徒に創造的対話を促すためには、深い教材研究が重要です。大学院で大いに学びを深めてほしいと思います。

特別支援教育コースより・・・教職大学院で過ごした2年間は、他校種の先生方との学びを通して、現場では気付くことのできなかつた様々な視点から、特別支援教育を取り巻く課題について広く知ることができ、それぞれの立場からアドバイスをし合ったり、共に考えたりすることのできたかけがえのない日々でした。意見の食い違いがあっても、互いの意見を尊重し合いながら一緒に考えることができたのは、「個に応じた」一人一人を大切にするといった基本的な考え方がみんなの根底にあったからではないかと思いました。修了してもなおその関係は、特別支援教育に携わる教員同士が校種を超えてつながるきっかけにしたいという共通の思いから、情報、教材の共有、相談などを積極的にし合う関係として続いています。在院生のみなさん、院での出会いや学びを大切に、共に高め合いながら有意義な時間を過ごしてください。

Editorial note: 第V期修了生は、修了後もそれぞれの教育課題を意識しながら、熱心に自己研鑽を続けています。そして人間的にも成熟し、新たな課題に立ち向かいながら、精進している様子が伝わってきました。

本教職大学院で学んだことを生かしながら、高知県だけでなく日本の子どもたちの健やかな成長のために、それぞれの立場での更なる健闘を祈っています。

発行者：高知大学大学院教職実践高度化専攻長 中野俊幸

編集者：教職実践高度化専攻総務係・ニューズレター委員

発行日：2024年10月15日

事務局：教職実践高度化専攻附属学校教育研究センター

〒780-8520 高知県高知市曙町2-5-1 (教職大学院係)

TEL 088-844-8457

E-mail ks33@kochi-u.ac.jp